

国際協力の経験を日本で生かしたい

● 田谷農園 田谷徹さん ●

# 協力隊の経験を 地域おこしの原動力に

「国際協力」の舞台は、海外だけではない。  
途上国の地域開発に協力した多くのJICAボランティアが、  
現地での経験を生かし、  
今度は日本国内の地域おこしなどに取り組んでいる。

協力隊に参加し、  
世界に羽ばたきたい

福井駅から車で約20分、豊かな自然に囲まれた美しい町ー福井市高屋町。田んぼや畑、ビニールハウスが町一帯に広がり、農業が盛んな地域で知られる。その一角にある「田谷農園」。ここで働くのは、青年海外協力隊OBの田谷徹さん(34)だ。

田谷さんは、福井県福井市出

身。農家の息子として生まれ育った。小さいころから農園の仕事を手伝い、田んぼや畑に出るのは当たり前だった。そんな田谷さんの夢は「協力隊に参加すること」。小学生の時、住み込みで働いていた従業員の青年に協力隊の話聞いたのがきっかけだった。

そして大学卒業後、念願かな

って協力隊に合格。3年間、インドネシアに派遣されることが決まった。「当時は、『これから世界をまたに掛けて生きていくんだ』と本気で思っていました(笑)。日本に戻ってくるつもりは全くなかったんです」。

赴任先の南スラウェシ州バル1県では、農家の生計向上に取り組んだ。最初のころは農業技術を伝えるためむしやりに働いたが、うまくいかないことも多かったという。しかし次第に、「自分が頑張るだけでなく、みんなと一緒にやってみよう」という気持ちで、それからは、村人を巻き込みながら、新品種の導入や栽培方法の改良などに挑戦していった。

任期も終わりに近づいたころ、「もつとインドネシア人の視

点で、農業を見る目を養いたい」と強く思うようになった。そして帰国後、インドネシアのポゴール農科大学大学院を受験。見事合格し、今度は学生としてインドネシアに戻った。「インドネシア人と机を並べて学ぶことで、地元の人にとっての農業開発が何なのか、少し見えてきたような気がします」。

しかし、いつしか一つの迷いが生まれるようになった。「海外で活動していても、その国、その村の開発に『点』でしかかかわれない。どこかむなしさを感じていました」。自分が腰を据えて、その「土地」に長く深くかわれる場所。それが、地元福井だった。「実家の農園に戻ろう」。田谷さんの新たな挑戦が始まった。



「田んぼ体験」には地域の多くの人たちが協力。田谷農園で働く福井市在住のセネガル人の従業員(中央)やインドネシアの研修生も参加した



(右)インドネシアの研修生とつみみ菜を収穫する田谷さん(左)  
(左上)協力隊時代の田谷さん。「小学校の文集にも『協力隊に行きたい』と書いていました」  
(左下)地域の子もたちと、生ごみを使った肥づくりに挑戦



## 地元福井で 農業を通じた地域おこし

日本では農業人口が年々減ってきている。その中で、若者の存在は大きなパワーとなる。田谷さんも地元で数少ない若手農業者の一人。「若手農業者クラブ(通称…みどりクラブ)」のメンバーと、農業を通じて町が元気になる取り組みを進めている。

その一つが、保育園の子どもたちを対象にした「田んぼ体験」だ。田植えから収穫まで、親子が共に学び、体験できるプログラム。農業にほとんど縁がなかった子どもたちにも、「自分が作ったお米はおいしい!」と大評判。農業の楽しさを実感してもらえた。今年には新たに、野菜栽培にも取り組んでいくという。

また、福井県立福井農林高等学校とインドネシア・バンドンのタンジュンサリ農業高校の交流事業にもアドバイザーとして参加する。「言葉や文化の壁を乗り越え、生徒同士がお互いの国に興味を深められるような交流プログラムを模索しています」。

さらに昨年から、タンジュンサリ農業高校の卒業生を住み込みの研修生として受け入れ始めた。「単なる交流にとどまら

ず、長期的な視点で人材を育成してほしい」という同校の校長先生の要請を受けて実現したものだ。研修期間は3年。農業技術や地域づくりを徹底的に指導している。

現在、田谷さんのもとで学ぶ研修生は2人。その一人、ヘンドラ・ウィハルナさん(22)は、「インドネシアと異なる日本の農業技術、地域おこしの手法を勉強して、自分の村のポテンシャルを探っていきたい」と意気込む。そんなヘンドラさんを「1年前とは見違えるように成長した」と目を細める田谷さん。「でも、まだまだですけどね」と笑う姿には、研修生への深い愛情が感じられる。「彼らは限られた時間の中で、いわば“人生”をかけて日本に来ていて、責任は重いです」。ゆくゆくは日本人の青年も受け入れ、農業を通じた異文化交流ができればと考えている。

「外に出てみて、地元の良さも悪さも、客観的に見えるようになった」という田谷さん。協力隊時代に現地に飛び込んで試行錯誤した経験が、今確かに生きています。これからは、途上国で奮闘を重ねた多くの若者が、日本の地域にたくさん元気をもたらしてくれることを期待したい。



農作業だけでなく、週1回座学の授業を設ける。  
「実践だけでなく理論を学ぶことも大事」